

内観イメージパース(講堂から生家を見る): 講堂は、生家母屋と対話しバランスを取るようその大きさと位置が決めます。この建物が生誕地の建築群に一体感を与えます。外部からは、生家もそうであるように、外塀の後ろに屋根のみが見えるように計画します。講堂の軸線上に展示室の開口を設けることで、視線が抜け、山と塀に囲われた内部に居ながらも、外部を感じられる空間となります。



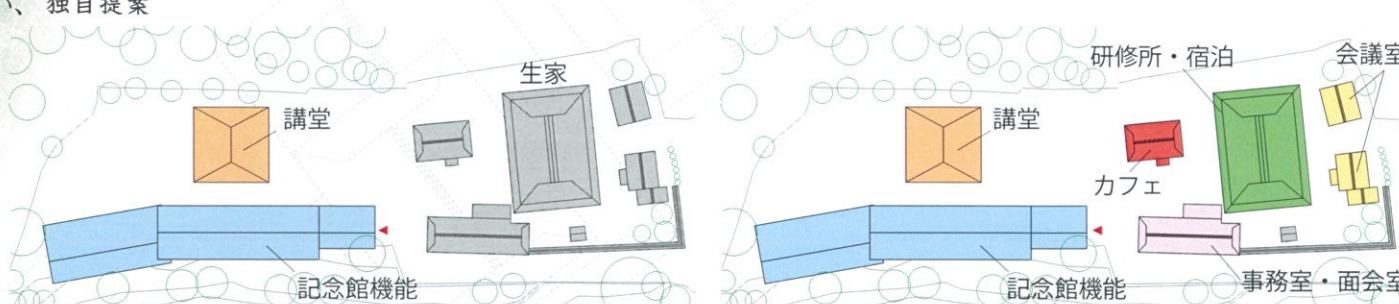
PR: プロジェクトへの意気込み、石田梅岩への想い、独自提案

生誕地全体の提案(将来計画)

梅岩の生誕地として記念館であると共に、学び、観光、地域コミュニティの拠点となる場所の提案をします。学びと観光の新たな試みとして、将来的に生家家屋群も改修し一体的に利用できる、地域ツーリズムによる観光機能と地域コミュニティ拠点機能を併せ持ったラーニングセンターとしての梅岩の里を提案します。

[記念館完成時] 記念館と生家が共存するような配置計画とし、豊かな自然に馴染む、一体感のある建物とします。

[生家改修案] 生家を改修し、敷地全体が学びの場へと拡張する。地域の人が集い、宿泊者にも対応できる場所とします。



- 地域ツーリズムの場
宿泊施設、地域の食材や料理が食べられる飲食スペースの整備により、梅岩の生まれ育った地域の風土や文化を多方面から経験できると共に、地域ツーリズムとしての観光スポットにもなります。
- 学びの場
生家家屋群は改修し、各種会議室、談話室、展示室、デスクワークスペースなどを整備することで、セミナー、企業研修、勉強会が行える教育・研修センターとなります。
- 地域コミュニティの拠点
施設に設けるレストラン・カフェ、講堂、会議スペースは、地域住民が寄り合い行事にも使える地域コミュニティの場となります。

外構・平面計画について
生誕地の敷地を、無理な造成は行わず、その地形、起伏なりをうまく利用しながら、建築の配置と外構計画を行うことで、隅々まで回遊でき、敷地全体を最大限利用する、計画とします。利用者が記念館内部と外部を連続して回遊することで、道のような記念館を作り出します。

60名程が一度に集えるスペースを確保します。
イベント時に使用できるスペースとします。

底下空間は、周囲の自然と建物群を鑑賞しながら、回遊できます。
展示室から庭へとつながる

展示室は、直射日光が入らないように壁で構成し、書物等を保管します。外塀に沿って細長い平面計画とし、道のような記念館となります。

ベンチに座りながら梅岩の庭が眺められます。

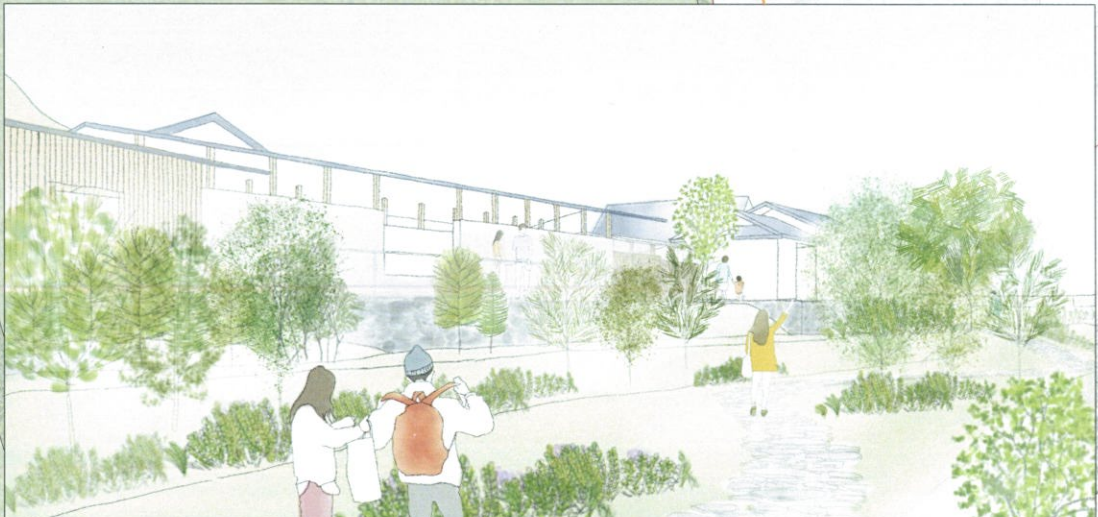
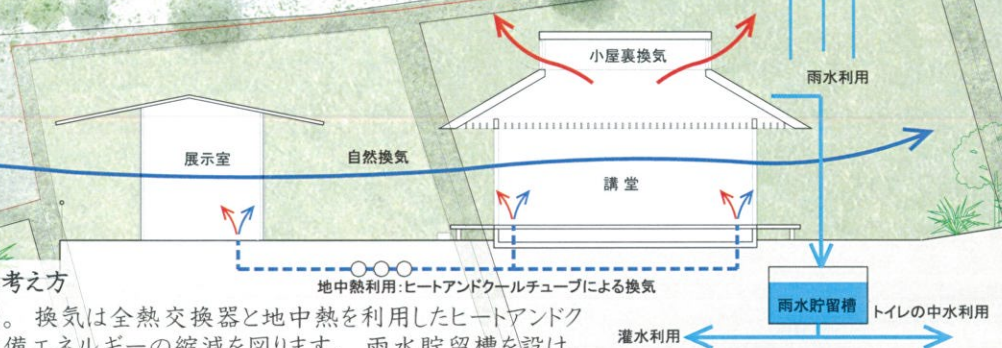
記念館のエンタランスは、将来の生家家屋群を含めた全体計画に対応できるように敷地の中心に配置します。

道幅を拡張し、誰もが使いやすい動線計画とします。

梅岩の庭: 梅の木や地域自生植物で造園し、梅岩の道を作ります。梅岩の考えにふけながら記念館からつづく梅岩の道を散策します。

東屋: 敷地全体を眺められる場所となります。

テーマ②立地条件(景観・安全・風土等)やライフサイクルコスト及び環境負荷の低減に対する考え方
ライフサイクルコスト及び環境負荷の低減に配慮し、自然エネルギーを活かした長生きする建築。換気は全熱交換器と地中熱を利用したヒートアンドクールチューブを採用し、空調負荷の低減を図ります。自然通気を最大限利用して、空調設備エネルギーの削減を図ります。雨水貯留槽を設け、灌水とトイレ利用します。自然採光が容易な計画とすることで、昼間の照明エネルギーの削減を図ります。利用者の設備要望に対してイニシャルコストとランニングコストとの間のコストバランスにおいて比較検討し、最大のコストパフォーマンスが得られるような質の高い設備計画を検討します。構造は経済性、合理性に配慮して、無理のない木造軸組工法を採用することで、メンテナンスがやすく長寿命でLCC低減に配慮した計画とします。導入する設備機器はLCC、環境性全体を考えた長寿命化機器とします。将来の変化にフレキシブルに対応可能な設備スペースを確保します。



外観イメージパース(梅岩の道から記念館をみる): 展示室、勤勉室、資料庫、事務室、トイレなど、記念館の主なスペースは、高さを抑え、壁の素材や屋根を分節し、生家の外塀が連続するように配置計画することで、計画敷地全体に一体感と調和を与えます。